

若手シンポジウム「異境の表象—Non-WASP 作家が描くアメリカの内と外」

コーディネーター	吉野 成美（近畿大学）
講師	木田 悟史（三重大学）
	舞 さつき（大阪大学・院）
	西光 希翔（関西学院大学・院）
	柳楽 有里（京都大学・非）

【全体趣旨】

アメリカが世界中から多種多様な移民を受け入れ大国へと成長していた 19 世紀後半、ギリシャに生まれアイルランドで育った移民としてアメリカに渡りながらも、アメリカの外に目を向けた作家、Lafcadio Hearn(1850-1904)がいた。彼の意識は、アメリカ全体が文化的憧憬を抱いていた当時のヨーロッパに対してではなく、有色人種の住む地域や国に向けられていた。そして、ハーンのこの大勢に反したベクトルの動きは数世代後、彼よりもずっと以前にアメリカに渡りながら、永らく書き言葉を禁じられてきた黒人奴隷の子孫たちがようやく表現の自由を手に入れたとき、別の次元で再現される。例えば、現代に生きる黒人女性作家の Toni Morrison(1931-)と Gloria Naylor(1950-)の意識もまた、アメリカ外の異なる世界へと向かっていく。

本シンポジウムでは、同じアメリカ文学という範疇にありながらも、活躍した時代や立場の全く異なるこの三人が描いた作品のうち、舞台を「アメリカ」以外の別の場所に設定したものを取り上げ、そこで描かれる異境空間において、登場人物がどのように行動し、また作者たちはアメリカをどのようにとらえているのか考察する。そして、自らその住人であるはずのアメリカにおいて、あえて異境を描いた non-WASP 作家のまなざしが、時空間を超えて驚くべき類似性を持ち合わせていることを指摘したいと思う。（文責：吉野成美）

【発表要旨】

Chita における Lafcadio Hearn のクレオリズム

木田 悟史

Chita: A Memory of Last Island (1889) は、Lafcadio Hearn のニューオーリンズでの約十年間におよぶクレオール研究の集大成とでもいえる小説である。Hearn にとってニューオーリンズとは白人クレオールたちの貴族的なサークルの名残をとどめる町であるとともに、人種や民族の混淆を常態とする猥雑な活力に満ちた町でもあった。この二つのまなざしは *Chita* にも認められる。嵐によって孤児となったニューオーリンズの裕福なフランス系クレオールの少女が拾われるルイジアナの海岸の移民コミュニティは、かつて彼女が所属していた白人クレオール社会とは異なり、したたかな移民たちが雑居、交流し、くだけた言語が飛び交う一種の異境である。

とくに 19 世紀の半ば以降、ニューオーリンズを中心とするクレオール社会は変革を迫られ、クレオールという言葉の定義も大きく揺らいでいた。本発表ではそのあたりの事情も考慮に入れつつ、*Chita* における二つの世界の対比的な描き方、そして前者から後者への移住を通して変貌する少女の姿のうちに、ハイブリディティを志向する Hearn のクレオリズムの表れを読み取りたい。

Lafcadio Hearn が見つめたカラードの娘たち―「有色人の娘」を中心に

舞 さつき

Lafcadio Hearn は、日本で広く親しまれているが、1890 年に来日する以前にも、アメリカのシンシナティやニューオーリンズ、そして仏領西インド諸島のマルティニークで多くの作品を残している。ギリシャ人の母とアイルランド人の父を持つ Hearn は、クレオール言語や雑種化された文化を記録した初めての人間のひとりであると言われており、来日以前の作品には混血の人々（特に女性）についての記述が多く見られる。「有色人の娘（“La Fille de Couleur”）」は、1890 年出版の *Two Years in the French West Indies* に収められている作品であり、それまでの作品では混血の女性の外見を賛美する描写が多いのに対して、本作品は彼の植民地に対する考えや、混血女性と人種偏見の関係などについて書かれている。本発表では Hearn がニューオーリンズ時代に執筆した記事の混血の女性描写に着目しつつ、彼の混血の女性への関心がどのように移り変わっていったかを考察したい。

崩壊する自己像―*Tar Baby* における視線

西光希翔

Toni Morrison の描く人物たちは視線を意識している。*The Bluest Eye* (1970) の Pecola に自身を醜いと感じさせるのは、自己に内在化された他者の視線だろう。第四作 *Tar Baby* (1981) も様々な視線が重要な意味をもっている。登場人物たちは、それぞれ自らの視線の優位性を信じて疑わない。その妄信の上に、彼らの自己は成り立っている。だが、本作品における視線には、この妄信が転覆される契機が含まれているのではないだろうか。とりわけ他者、すなわち外からの視線は見られている自分を意識させ、他者が見る自己像と自分が描く自己像とのずれを認識させる。盲目的に信じていた自己像が崩壊するとき、そこにはそれまでとは異なった自己像が浮かび上がるだろう。どれだけ苦痛であったとしても、自分を見つめる視線を知覚する限り、自分の姿を見続けなければならない。だとすれば、本作品における盲目のテーマは何を意味するのだろうか。本発表では *Tar Baby* における視線の作用を確認したい。その上で、本作品における視線と、作品の舞台がアメリカの外に設定されていることがどのように関わっているのか、考えてみたい。

Gloria Naylor の *Mama Day* における聞こえない声

柳 楽 有里

Gloria Naylor の *Mama Day* (1988) は、奴隷制社会において自由黒人としての地位を勝ち取った女性 Sapphira Wade の子孫たちの物語である。作品の舞台は、シーアイランズの一つと思しき架空の島ウィロウ・スプリングスであり、この島は黒人たちだけの島として独自の文化を継承してきた。薬草を使った民間療法やまじないが根付いているこの癒しの空間の中心には、ある悲劇が隠れていていつ噴出するかも分からない。この悲劇から Day 家の末裔 Cocoa Day を救うため、Miranda Day は Sapphira を始めとする先祖の声に耳を傾ける。

アメリカ社会において虐げられて沈黙を強いられた弱者である黒人女性にとって自分たちの声を見つけることは重要課題であったことは言うまでもない。本作品は声というメタファーに頼っているものの、ネイラーの狙いは複雑である。ネイラーの描く登場人物たちは必ずしも誰かに届くのを前提とした声を発しているわけではないからだ。このような声を感じ取ることができる特殊な能力を持つのは Miranda と Cocoa のみである。本発表では、直接聞こえない声の背後の意味を汲み取るというテーマが、本作品の形式と内容に密接に関わっていることを考察する。